

日付と干支の問題

——太安万侶の墓誌から——

三 木 太 郎

はじめに

昭和五十四年一月十八日、奈良県田原町此瀬^{このせ}の茶畑から、太安万侶の墓誌が発見されたが、その後の調査で、その場所が太安万侶の墓所であることも確認された。

この発見と確認は、歴史的意義という側面からみても日本古代史上画期的なできごとである。昨年発見された稲荷山古墳出土の鉄剣銘文と比較しても遜色がないと思われる。

墓誌は、銅板で作られており、厚さ一ミリ、長さ二十九・一センチ、幅六・一センチほどと発表されたが、そのなかに明瞭に四十一文字が刻まれていた。

左京四條四坊從四位下勲五等太朝臣安萬侶以癸亥

年七月六日卒之 養老七年十二月十五日乙巳

(左京四條四坊、從四位下・勲五等太朝臣安萬侶、癸亥の年を以て卒す。養老七年十二月十五日乙巳)

この墓誌の内容が、右の鉄剣銘文に比すべき重要性をもっていることは、すでに発見当初から一部の研究者によって指摘されていたが、その内容について、さらに多くの研究者の参加をえてさまざまな角度から分析されていること

は、論文目録を一見しても知られる通りである。

筆者もかねて墓誌の干支と日付の問題に関心を持ち、『続日本紀』（新訂増補国史大系本）と各種の金石文との比較を試み、昭和五十四年三月ごろまでには一応のデータ処理を終えていたが、成文の機会をえないまま荏苒日を過ごすにいたった。その間、暦日関係論文は、岡田清子氏「太安万侶の墓誌―日付・干支問題の解決―」（『文学』昭和五十四年五月号）に眼を通しただけで、先説の成果には十分接しえていないから、あるいはすでに先説のくりかえしになる恐れなしとしないが、ひとまず、岡田説とのかかわりにおいてデータを提示しておきたい。

なお、それに先立って、墓誌の史料的价值について私見を述べておく。

筆者は、この墓誌をこのように評価する。

(1) 太安万侶の実在性が証明された。

(2) 『古事記』偽書説はきわめて不利になった。その理由は、次の四点に集約できる。

① これまで疑問視された『古事記』序文の「勲五等」の勲位が、まちがいなく安万侶のものであったこと。

② 墓誌と『古事記』序文、『続日本紀』の三者間に、位階・卒年などの基本的な矛盾がない。

③ しかも、氏名表記が、墓誌、『古事記』序文ともに「太安万侶」とあり、『続日本紀』の「太安麻呂」と異なっていることは、『古事記』序文が『続日本紀』の影響下になかったことを意味し、その事実性を保証することになる。

④ 「勲五等」の勲位が明記された異例さは、むしろその異例さが墓誌、『古事記』序文に共通していることにおいて、序文の当代性を保証することになった。⁽²⁾

(3) 本貫地と墓所が明らかになり、これまでの太安万侶の墓（橿原市西新堂町）が伝承上の誤りであることをはっきりさせた。

(4) これまでまったく不明であった、安万侶の埋葬年時と思われる年代がえられた。

このほか、まだ確認されるべき多くの点が残されているが、以上の考証とともに別の機会にゆずり、ここでは、主題に則して論を進めよう。

(一) 墓誌の暦日の問題

現在問題になっている墓誌の暦日の矛盾は、すでに知られているように、『三正綜覧』（明治十三年、内務省地理局編纂）と、それによった『新訂増補国史大系・続日本紀』との復元暦日が、墓誌の暦日と一致しないことから生じたものだが、もうすこし詳しくこの点にふれると、こういうことである。

(一) 太安万侶の死亡日を、墓誌は「養老七年七月六日」と記している。ところが、『続日本紀』には同「七月庚午」のように干支で表わされている。『続日本紀』のこの月には朔日（一日）の表記を欠いているので、同書から庚午が何日に当たるかを知ることとはできないから、両者の比較からは「六日＝庚午」とみることが可能である。ところが、『三正綜覧』は七月朔日を甲子と記し、国史大系本の校注者はこれをもとに換算して庚午に七日を配している。そしてこの暦日が誤記とか換算誤りでないことは、コンピュータを駆使して従来暦の修正を行った内田正男氏『日本暦日原典』（昭和五十年、雄山閣）も同じ結果をえられていることで傍証される。したがって、六日と庚午（七日）は明らかに一日の差をもって対立することになる。⁽³⁾

(二) 次に、太安万侶の埋葬日を記したと思われる墓誌の記載は、「養老七年十二月十五日乙巳」とある。が、これも国史大系本の校注者による「壬辰朔」の注記と合わない。朔日が壬辰なら、十五日は「丙午」となる。また「乙巳」を重視すれば、その日付は「十四日」となる。十二月一日が壬辰に当たることは、『日本暦日原典』とも一致するから、墓誌と『三正綜覧』などとは明らかに一日のズレを生じている。⁽⁴⁾

この現象をどう説明するかが、当然、研究者に課せられた重要な命題となった。

調査を担当した樞原考古学研究所は、両者の日付を対立するものとはみずに、安万侶が死んだのは六日だが、七日に役所に届けたためのくいちがいと説明している。(一)についてはあるいはそういうこともあるかも知れない。だが、(二)のズレの説明にはならない。

死亡日の数え方は死の前日を基準とする風習が今も一部にあるから、そのゆえであろう、との末永雅雄氏の見解も興味ぶかいが、それも(二)についての説明にならない。

この点、使用暦の相違にもとづいたズレであろうとする岸俊男氏の指摘は、すでに使用暦の違いが一日のズレを生じさせる例を知っているわれわれにとつて、もっとも説得力を持つものであったが、それではどんな暦が使われたのかとなると、その証明は不可能であろう。

このほかにもいろいろの見解があるが、それはおき、これら諸説に共通してみられる理解は、両者が事実を記録しているとの前提に立っていることである。

これに対し、岡田氏はまったく異なった価値観によって明解な論証をもって説明している。

つまり、『続日本紀』には養老七年のどの月にも朔日が記されていないから、『三正綜覧』などの復原暦で日付を

推定してきたことはやむをえないが、いまここに、日付・干支をもった墓誌が出現したのだから、すみやかに墓誌の暦日を採用するのが筋道だろうといわれる。

そして、七月六日＝庚午の前提にたって、七月朔日を乙丑と定め、ついで、その他の定点となる確定暦日を『令集解』選叙令・同司主典条に「養老七年十一月十六日太政官処分」とあるのと、『続日本紀』養老七年十一月条の「丁丑」との照応に求め、「十一月丁丑十六日」の干支・日付を確認し、さらにこれが復元暦とも一致するので採用されている。こうして、

七月朔日は乙丑（六日は庚午）

十一月朔日は壬戌（十六日は丁丑）

をもとに、七、八、九、十月の各月の大小・朔日を求めると、次の四通りがえられるので、A～Dのどれかが実際の暦日であつたろうといわれている（表参照）。

（参考表）養老七年

復元暦		岡田氏推定		暦	
月	大小朔	A	B	C	D
⑦	小 甲子	大 乙丑	小 乙丑	小 乙丑	小 乙丑
8	大 癸子	小 乙未	大 甲午	小 甲午	小 甲午
9	大 癸亥	小 甲子	小 甲子	大 癸亥	小 癸亥
10	小 癸巳	小 癸子	小 癸巳	小 癸巳	大 壬辰

次に、(二)の養老七年十二月十五日乙巳の日付・干支についても、同様の手法をとり、(1)の定点とした十一月十六日丁丑と十二月十五日乙巳にもとづき、復元暦をこのように修正する。

復元暦

十二月朔は壬辰、従って十一月は大。

岡田氏推定暦

十二月朔日は辛卯、従って十一月は小。

いま一度岡田氏の手法を整理すると、

- (1) 墓誌の日付・干支は復元暦より信用できる。
- (2) 復元暦には誤りがある。たとえば明治版『三正綜覧』には上巻に約二四〇カ所、下巻に約七〇〇カ所の誤りのあることが神田茂氏によって指摘されている。

- (3) 『続日本紀』『弘仁格』『令集解』の日付・干支が一致する場合、その暦日を正しいとみる。

- (4) したがって、(1)・(3)によって、(2)の復元暦を修正できる、となる。

(1)の判断が今日の学問的水準において承認されるのであれば、岡田氏の説はまことに合理的で疑問の余地のないものとなる。

だが、墓誌は、「『アリウル』を『デアル』・『デナケレバナラナイ』にしたのは、墓誌の出現でした。地中から出てきた墓誌に刻みこまれた文字が語りかけるものが、復元暦の蓋然性を超えたということではないでしょうか。近代人の得意とする懷疑精神なるものも、この場合、このへんで休息させることが適切だと思います。」と岡田氏が言

い切っておられるほど、信頼度の高いものと見なしてよいものであろうか。

氏の立論は、もし墓誌の信頼度に問題があるとしたら、もろくもくずれ去ってしまうものである。したがって、岡田氏の説を承けて、毎日新聞社編『古事記の証明』（昭和五十四年、毎日新聞社）が、

従来の復原暦では、七月～十月間の大小月を各二としているが、墓誌の出現によって、大一、小三とするのが正しく、また、大月とされていた十一月も、小月と改められるべきである、という。墓誌の干支問題は、これで解決されたといえよう。（三二頁）

と結論づけているのも性急にすぎる。岡田氏の説も、まだ有力な一つの仮説にすぎない。

いま、墓誌の信頼度と書いたが、正確度といった方がよいだろう。記述の正確度をはかることは、今回の墓誌のよ

うに直接的な傍証を持たない場合には、誰にもできないことだと私には思えるのだが。

(2)の復元暦に誤りがあるからの根拠にしても、九四〇カ所余の誤りがあることが、すぐに復元暦のすべてが信頼できないことにつながるだろうか。「本書の計算には電子計算機を利用したが、その計算法については原暦法が記載されている宋書・唐書あるいはその計算法の解説書である長慶宣明暦算法・皇和通暦付録などをもとに、できるだけ暦法が指定する計算法に忠実に従った」ところの『日本暦日原典』の復原結果とも一致する『三正綜覧』の養老七年の復原暦日を、墓誌を重視することによって、むげに退けてよいのだろうか。

筆者は、墓誌の暦日が絶体に正しいともまた誤りであるとも判断する根拠をもたない。だが、他の墓誌を含む金石文には、疑問の余地の存するもののあることから推して、この墓誌の正確度を絶体視することは、やはり避けるのが賢明であると思っている。

記録の正確度に疑いを寄せるのは、それが人間の「したこと」だからである。人間のしたことには、不用意な誤りがつきまとうというのもよく知られていることではあるまいか。

したがって、こうした認識に立って、墓誌と復元暦の一日のズレの生じた原因を推測すると、前記(一)については、墓誌と『続日本紀』のどちらかに日付と干支の換算誤りが起こった、(二)については墓誌に換算誤りがあった、—との可能性を捨て切れない。もとより確たる証拠があるわけではない。だが、換算のさいに、思いがけないこうした誤りが生じている例を上げることができる。以下、その事例を提示しよう。

(二) 国史大系本の換算ミス

次の一覧表は、『新訂増補国史大系・続日本紀』(昭和四十七年八月発行の普及版)にある暦日の校注箇所を、換算しなおしたものである。暦学上の検討を加えたというものではなく、朔日はすべて注記に従い、単純換算を行なったものである。

(備考・印の力所は三正綜覧によって補った)

記事 番号	続 紀 暦	日 (内は大系本傍注)	大系本	訂 正	誤 差	頁	行
1	文武天皇二〔戊戌〕年	正月 壬戌朔 戊寅	一五日	一七日	二日	二	10
2	同 三〔己亥〕年	六月〔甲申朔〕丁未	一四日	二四日	一〇日	四	12
3	大宝元〔辛丑〕年	八月〔辛丑朔〕丙寅	二五日	二六日	一日	一三	2
4	同 三〔癸卯〕年	二月〔癸巳朔〕癸卯	一七日	一日	六日	一七	12
5	同 同	八月〔庚申朔〕甲子	四日	五日	一日	一九	1
6	慶雲二〔乙巳〕年	五月〔己卯朔〕丙戌	七日	八日	一日	二二	12

記事 番号	続 紀 曆	日（）内は大系本傍注	大系本	訂正	誤差	頁	行
7	慶雲二〔乙巳〕年五月〔己卯朔〕丁亥	同	八日	九日	一日	二二	12
8	同	同	二四日	二五日	一日	々々	13
9	同	六月〔己酉朔〕乙亥	二六日	二七日	一日	々々	々々
10	同	同	二七日	二八日	一日	々々	々々
11	同	九月〔戊寅朔〕丙戌	二日	九日	七日	二三	3
12	慶雲四〔丁未〕年二月〔庚午朔〕戊子	同	九日	一九日	一〇日	二七	12
13	同	同	一二日	二二日	一〇日	々々	々々
14	同	四月〔戊辰朔〕丙申	二五日	二九日	四日	二八	9
15	同	十二月乙丑朔戊辰	二四日	四日	二〇日	三二	16
16	和銅三〔庚戌〕年四月辛巳朔辛丑	同	二〇日	二一日	一日	四三	14
17	同	十二月〔乙未朔〕丁巳	二一日	二三日	二日	五〇	9
18	同	六月〔癸巳朔〕乙卯	二二日	二三日	一日	五三	5
19	養老四〔庚申〕年二月〔甲申朔〕戊戌	同	一三日	一五日	二日	七九	14
20	同	九月〔己巳朔〕庚寅	二三日	二二日	一日	九四	11
21	神龜元〔甲子〕年四月庚寅朔癸卯	同	一七日	一四日	三日	一〇一	1
22	同	五月〔癸未朔〕甲辰	二三日	二二日	一日	一〇三	11
23	天平二〔庚午〕年八月〔癸未朔〕己丑	同	八日	七日	一日	一二三	6
24	同	十月〔丙寅朔〕辛巳	一五日	一六日	一日	一七五	9
25	同	同	一六日	一七日	一日	々々	15
26	同	同	一九日	二〇日	一日	々々	16
27	同	十一月〔癸酉朔〕己亥	一七日	二七日	一〇日	一九四	5
28	天平勝宝三〔辛卯〕年四月〔癸丑朔〕甲戌	同	二三日	二二日	一日	二一二	12

記事 番号	続 紀 曆	日 （ ）内は大系本傍注	大系本	訂 正	誤 差	頁	行
29	天平勝宝八〔丙申〕歲四月〔甲申朔〕乙巳	二三日	二二日	一日	二二四	7	
30	天平宝字元〔丁酉〕年十一月〔乙亥朔〕壬寅	二九日	二八日	一日	二四三	13	
31	同六〔壬寅〕年十二月乙巳朔乙卯	二一日	二一日	一〇日	二八九	16	
32	天平神護元〔乙巳〕年閏十月己丑朔癸卯	五日	一五日	一〇日	三二五	8	
33	神護景雲二〔戊申〕年八月壬甲朔辛酉	二三日	二〇日	三日	三五七	15	
34	宝亀四〔癸丑〕年正月丁丑朔庚辰	一四日	四日	一〇日	四〇八	13	
35	同五〔甲寅〕年五月〔己亥朔〕庚子	五日	二日	三日	四一六	14	
36	同六〔乙卯〕年六月癸亥朔庚寅	二六日	二八日	二日	四二一	16	
37	宝亀七〔丙辰〕年十月〔乙酉朔〕乙未	二二日	二一日	一日	四二九	14	
38	同九〔戊午〕年十月〔癸酉朔〕乙未	二二日	二三日	一日	四四三	10	
39	同十〔庚申〕年正月丁卯朔己巳	二日	三日	一日	四五五	4	
40	延暦元〔壬戌〕年四月〔癸丑朔〕乙丑	一二日	一三日	一日	四八四	3	
41	同七〔戊辰〕年四月〔戊寅朔〕戊子	一二日	一一日	一日	五二九	5	
42	同十〔辛未〕年九月〔戊午朔〕庚申	二日	三日	一日	五五五	14	
43	同	五日	六日	一日	々	15	
44	同	六日	七日	一日	々	々	
45	同	一六日	一七日	一日	々	16	
46	同	一八日	一九日	一日	五五六	1	
47	同	一九日	二〇日	一日	々	5	
48	同	二〇日	二一日	一日	々	7	
49	同	二一日	二二日	一日	々	10	

校注の施された四六二九カ所のうち、四九カ所にミスが発見された。誤記・誤植による個所もあると予想されるが、いちおう一括して換算ミスとして取扱うと、一・〇六パーセントにのぼる。

校訂の厳密さをもって知られる国史大系本に、これほどのミスがあることからいって、換算時に起こるちょっとした錯覚が、いかに生じやすいかが分かるうというものである。

さらに四九カ所のミスのうち、三一カ所は一日の誤差に集中している。つまり、ミスの六三・三パーセントをしめるのが、一日のズレなのである。そこで筆者も試みに頭の中で適当に換算を行なってみたところ、やはり一日の誤差が頻出するので驚いたことを記しておこう。

(三) 国史大系本と『暦日原典』との比較

次に、内田正男氏『日本暦日原典』によると、

従来暦日の基準として使われてきた「三正綜覧」の基底のあいまいさは本書によって明らかにされ、日本の暦日に関する限り本書をこそ原典とし、……。

と抱負のほどが披瀝されているので、『三正綜覧』によって校注を施された国史大系本が、どの程度修正を要するのかをみてみた。

(備考・印の個所は換算誤り及び誤記のあるもの。△▽内は三木補)

記事 番号	続紀年月日	大系本校注	暦日原典	頁	行
1	天平五年三月辛亥	一四日〔戊戌朔〕	一三日〔己亥朔〕	一三一	7
2	癸丑	一六日	一五日	〃	10
3	戊午	二二日	二〇日	〃	10
4	天平神護二年二月庚寅	四日〔丁亥朔〕	五日〔丙戌朔〕	三二九	11

記事 番号	続紀年月日	大系本校注	暦日原典	頁	行
5	天平神護二年二月甲午	八日	九日	三二九	11
6	己亥	一三日	一四日	"	12
7	壬寅	一六日	一七日	"	13
8	丙午	一六日	一七日	"	13
9	丁未	二一日	二二日	"	15
10	癸丑	二七日	二八日	三三〇	3
11	乙卯	二九日	三〇日	"	4
12	同 三月乙酉	一三日〔丙辰朔小〕	三〇日〔丙辰朔大〕	三三一	5
13	同 四月壬辰	八日〔乙酉朔大〕	七日〔丙戌朔小〕	"	6
14	丙申	一二日	一日	"	9
15	己亥	一五日	一四日	"	10
16	甲辰	二〇日	一九日	"	10
17	丁未	二三日	二二日	"	12
18	甲寅	三〇日	二九日	"	16
19	宝亀元年正月辛未	八日〔甲子朔〕	七日〔乙丑朔〕	三七四	3
20	乙亥	一二日	一日	"	3
21	戊寅	一五日	一四日	"	4
22	甲申	二一日	二〇日	"	4
23	同 七年閏八月庚寅	六日〔乙酉朔〕	五日〔丙戌朔〕	四二九	5
24	甲辰	二一日	一九日	"	8
25	壬子	二八日	二七日	"	9
26	同 十一年八月己亥	七日〔己巳朔〕	八日〔壬辰朔〕	四六二	13

記事 番号	続紀年月日	大系本校注	暦日原典	頁	行
27	宝龜 十一年 八月壬寅	一〇日	一一日	四六二	14
28	丙午	一四日	一五日	"	14
29	庚戌	一八日	一九日	"	15
30	甲寅	二二日	二三日	四六三	2
31	乙卯	二三日	二四日	"	2
32	庚申	二八日	二九日	"	8

つごう三二カ所修正されなければならないようである。この比率は、○・六九パーセントとなるので、かなり高い。このように、月の大小は変更の余地があったのであるから、この点を重視すれば、さきの岡田氏の墓誌重視の考え方はそれとして分からぬではない。が、墓誌の吟味ができない以上墓誌をとるか復原暦をとるか、どちらかを選択するしかないというほど、はっきりしたものでもないであろう。

(四) 『続日本紀』の問題点

次に、復元暦の問題以外に、『続日本紀』そのものに、編纂上生じた大きな過誤がないかどうかを知るために、国史大系本の頭注により、問題の個所を抜き出してみたのがこの一覧表である。

(備考 ・ 印の力所は『三正綜覧』により修正し、() 内傍書は『日本暦日原典』により補った)

記事 番号	続紀年月日	日付	大系本頭注
1	大宝 二年 五月〔丁卯朔〕丁亥	二二日	丁亥条、公卿補任係十七日

記事 番号	続紀年月日	日付	大系本頭注
2	大宝三年二月〔癸巳朔〕丁未 丙申 癸卯	一五日 一四日 一三日 一二日 十一日 十日 九日 八日 七日 六日 五日 四日 三日 二日 一日	丁未条、当移于丙申（癸卯—三木）条下、或云恐当作乙未（三日）、紀略与此同
3	慶雲元年十一月〔癸未朔〕癸巳 庚寅	一日 二日 三日 四日 五日 六日 七日 八日 九日 十日 十一日 十二日 十三日 十四日 十五日 十六日 十七日 十八日 十九日 二十日 二十一日 二十二日 二十三日 二十四日 二十五日 二十六日 二十七日 二十八日 二十九日 三十日	庚寅条、当在癸巳条上
4	三年九月〔壬寅朔〕丙寅	二五日	丙寅、略記作乙丑
5	十二月辛未朔己卯	九日	己卯条、略記為慶雲二年十二月乙丑事
6	四年十一月〔乙未朔〕甲寅	二〇日	甲寅、原作廿日、今從下文及谷朱イ本
7	七月〔丙申朔〕壬子 庚子 辛丑	一七日 五日 六日	庚子、辛丑、此二条当在壬子条上
8	十月〔乙丑朔〕戊子	二四日	十月戊子、文禰曆墓志為九月廿一日
9	和銅五年十月丁酉朔癸丑	一七日	丑、原作酉、今從紀略
10	十一月〔丙寅朔〕		一、原作二、今推改
11	六年十二月〔庚寅朔〕己酉	二〇日	己酉条、類史一〇七係于十月
12	七年四月〔丁巳朔〕壬午 辛巳	二六日 二五日	壬午条、宜在辛巳条下

記事 番号	続 紀 年 月 日	日 付	大 系 本 頭 注
13	靈龜 元年 五月 辛巳朔 乙巳 己亥 壬寅	二五日 一九日 二三日	乙巳条、恐当移壬寅条下、谷朱一本作乙未(十五日)按類史二七二紀略亦作乙巳 己、原作乙、今從紀略
14	二年 五月〔丙子朔〕 己丑	一四日	己、原作乙、拋紀略改
15	養老 元年 四月〔庚午朔〕 丙戌 癸未	一七日 一四日	癸未条、当在丙戌条上
16	十一月〔丁酉朔〕 戊午 丁巳	二三日 二一日	戊午条、当移丁巳条下
17	二年 四月 乙丑朔 乙亥 癸酉	一一日 九日	乙亥、原作丙辰、拋紀略改 癸酉条、当在上文乙亥条上
18	四年 八月 辛巳朔 壬辰 癸未 甲申 丁亥	一二日 三日 四日 七日	壬辰条、当在丁亥条下
19	五年 四月〔丁丑朔〕 丙申 癸卯 乙酉	二〇日 二七日 九日	乙酉条、当移上文丙申条上

記事 番号	続紀年月日	日付	大系本頭注
20	養老六年一月癸卯朔 壬戌 庚申	二〇日 一八日	壬戌条、当在庚申条下
21	神龜元年三月甲申朔 甲子 辛巳 壬午 庚申	一日 五日 二二日 二三日 一日	庚申、即是月朔、拾芥抄下云、遣流人国々云々、神龜元年六月三日定、推干支六月三日当庚寅、然類史八七略記与此同、今暫仍旧
22	六月〔戊子朔〕 癸巳	六日	癸巳、原作庚巳、今從紀略、御本巳字傍書寅
23	十一月〔丁巳朔〕 甲子 辛未 己卯 辛巳 壬午 庚申	八日 一五 二三 二五 二六 四	庚申条、当在甲子条上、然紀略与此同
24	二年閏正月〔丙戌朔〕 己丑 壬寅 戊子	四日 一七日 三日	戊子条、当在己丑条上
25	三年八月〔丙午朔〕 癸丑	八日	癸丑、原作庚寅、今從紀略

記事 番号	続紀年月日	日付	大系本頭注
26	神龜 三年十一月〔甲戌朔〕己亥 己丑	二六日 一六日	己丑条、此条宜在己亥条上
27	五年 八月〔甲子朔〕甲午 甲申 壬申 丙戌 丁卯	二一日 九日 二三日 四日	甲午、是月无、午恐子、而略記亦在甲申条次 壬申条、当在甲申条上 丁卯条、当在壬申条上
28	天平 三年十一月〔丙午朔〕庚戌	五日	庚戌、按是歲冬至在庚申（十五日）戌当作申
29	六年十一月〔戊午朔〕戊寅	二一日	戊寅、三代格略記作廿日
30	七年十一月		一、原作二
31	八年 一月〔辛巳朔〕戊申 辛丑	二八日 二一日	戊申条、当在辛丑条下
32	九年 一月〔乙亥朔〕辛酉		辛酉、是月无、恐誤
33	十一月〔辛未朔〕己丑	一九日	己、原作乙、今推改
34	十二年十二月 癸丑朔 丙寅 辛酉 壬戌 癸亥	一四日 九日 一〇日 一一日	丙寅、推干支不可在辛酉上、且下文有丙寅条、恐有誤

記事 番号	続 紀 年 月 日	日 付	大 系 本 頭 注
34	天平十二年 十月 癸丑朔 乙丑 丙寅	一三日 一四日	
35	十五年 七月 戊戌朔 庚寅		庚寅、是月无、或当作甲寅（十七日）
36	十六年 五月 癸未朔 ^{（亥）} 庚戌		庚戌、是月无、或当作庚辰（十八日）
37	七月 壬戌朔 戊戌		戊戌、是月无、或当作戊辰（七日）
38	十八年 四月 壬午朔 己酉		己酉、是月无、或当作乙酉（四日）
39	十九年 六月 乙巳朔 丁卯	二三日	卯、原作亥、今従御本傍書金本
40	二十年 三月 辛未朔 戊寅	八日	寅、原作戌、拠原傍朱書金本印本改
41	十月 戊戌朔 丁亥		丁亥、此月无、恐誤
42	天平勝宝元年十一月 辛卯朔 乙卯 丙辰 丁巳 戊午 己未 庚申 己酉 甲寅	二五日 二六日 二七日 二八日 二九日 三〇日 一九日 二四日	己酉、甲寅兩条、並当在上文乙卯条上

記事 番号	続紀年月日	日付	大系本頭注
43	天平勝宝元年十二月〔辛酉朔〕丁亥 戊寅 丁亥	二七日 一八日 二七日	丁亥、下文又有丁亥条、推歩干支在下為是、一本作乙亥（十五日）
44	四年 一月 己卯朔 癸卯	二五日	癸卯、紀略作辛卯（十三日）
45	五月〔丙午朔〕己丑		己丑、是月无、一本作己未（十四日）
46	八歳 四月〔甲申朔〕戊戌	一五日	戌、原作辰、今從金本及類史三
47	天平宝字四年一月 癸亥朔 癸未 丙寅 丁卯 戊辰 己巳 戊寅 丁丑 己卯	二一日 四日 五日 六日 七日 一六日 一五日 一七日	癸未条、当在下文己卯条下 戊寅、当在丁丑条後
48	六月〔己未朔〕癸卯		癸卯、此月无、略記作乙亥「十七日」
49	五年 一月 丁亥朔 戊子	二日	子、原作午、拠御イ本金本堀本及紀略改
50	八月 癸丑朔 甲子 甲子	一二日 一二日	甲子、或当拠谷朱イ本作甲寅（二日）

記事 番号	続紀年月日	日付	大系本頭注
51	天平宝字六年閏十二月〔乙亥朔〕丙子	二日	丙子、金本堀本作丙午、推干支改補
52	八年十月〔甲子朔〕壬辰 辛卯	二九日 二八日	辛卯条、当在壬辰条上
53	天平神護二年二月〔丁亥朔〕甲午 己亥 壬寅 丙午	（丙戌） 八日 （四） 三日 二日 一日 二〇日	丙午、原作甲午、抛下文六月丙申勅及谷朱イ本改
54	神護景雲元年二月〔辛巳朔〕丙午 丁酉 庚子 壬寅 癸卯 丁未	二六日 一七日 二〇日 二二日 二三日 二七日	丙午、当移于癸卯丁未間、或云丙申之譌
55	十月〔丁丑朔〕壬戌		壬戌、是月无、恐当作壬寅「二十六日」、或云十一月十六日条錯簡
56	十一月〔丁未朔〕壬寅 乙巳 甲寅 癸亥	八日 一七日	壬寅、是月无、広前云推干支十月廿六日壬寅、廿九日乙巳、今皆置此月蓋錯簡、元融云、依去戊申年之文此条疑当在二年以後 乙巳、是月无、恐当作己巳「二十三日」

記事 番号	続紀年月日	日付	大系本頭注
56	神護慶雲元年十一月〔丁未朔〕丙寅	二〇日	
57	三年八月丙申朔庚午		庚午、是月无、谷朱イ本作庚子（五日）
58	宝龜二年十二月癸丑朔甲戌 癸酉	二二日 二一日	甲戌、此条宜在癸酉条次
59	三年二月〔壬子朔〕戊辰 癸酉 乙亥 丁卯	一七日 二二日 二四日 一六日	丁卯条、当在戊辰条上、或云丁丑（廿六日）之誤
60	四月〔辛亥朔〕丁巳	七日	丁、原作己、今從原傍書及印本
61	四年一月丁丑朔戊辰 己巳 癸未 癸酉 戊寅 庚辰	七日 一四日 ^{（四）} 二日	〔二月廿三日力〕戊辰条以下正月二月紀多錯乱、今暫仍旧 〔二月廿四日力〕 癸未、原作辛未、此月无、辛未、勅勅文改 〔二月廿八日力〕
62	六月乙巳朔戊辰	二四日	戊辰、印本作戊午（十四日）
63	九月〔癸酉朔〕庚辰 丁亥	八日 一五日	

記事 番号	続紀年月日	日付	大系本頭注
63	宝龜 四年九月〔癸酉朔〕壬辰 己亥 己卯	二〇日 二七日 七日	己卯条、当在庚辰条上
64	五年 七月〔戊戌朔〕壬戌	二五日	戌、原作辰、今從印本
65	六年 一月 乙未朔 庚寅		庚寅、此月无、恐当作庚申（二六日）
66	四月〔癸亥朔〕辛未 庚午	九日 八日	庚午条、当在辛未条上
67	九月〔壬辰朔〕甲辰 壬寅	一三日 一日	壬寅、此条当在甲辰条上
68	九年 五月〔丁未朔〕辛未	二五日	辛、原作至、今從御本傍書金本印本及類史二七一
69	十年 十月〔丁酉朔〕乙巳	九日	乙、原作己、今從谷朱イ本
70	延暦 元年閏一月〔甲申朔〕甲子		甲子、是月无、恐当作甲午（十一日）
71	九月〔庚辰朔〕辛亥		辛亥、広前云此条当在十月庚戌朔下、元融云疑辛卯（十二日）之譌
72	三年 二月〔壬寅朔〕辛巳 己丑		辛巳、己丑、並是月无、広前云按辛巳一条疑当付上叙位「一月七日程」上 己丑一条次于正月戊子「一六日」下除二月辛巳四字、又或己丑当作己巳（ 廿八日）
73	三月〔壬申朔〕丙申	二五日	丙申条、当移乙酉条次、広前云恐甲申（一三日）之誤

記事 番号	続 紀 年 月 日	日 付	大 系 本 頭 注
74	延暦四年二月〔丙寅朔〕丁未		丁未、是月无、或当作乙未（卅日）
75	十一月 癸巳朔 庚子 壬寅 甲辰 丙辰 丁巳 庚子	八日 一〇日 一二日 二四日 二五日	庚子、上文既出、宜合此条于上文、一本作庚申「二十八日」
76	五年十二月〔丙辰朔〕乙卯		乙卯、是月无、或当作己卯（廿四日）
77	六年三月〔乙酉朔〕乙亥		乙亥、是月无、或当作己亥（十五日）
78	八年四月〔癸酉朔〕辛酉		辛酉、是月无、一本作辛卯（十九日）
79	十一月〔己亥朔〕壬午		壬午、是月无、恐当作壬子（十四日）
80	十年二月〔辛卯朔〕甲辰 乙未 癸卯	一四日 五日 一三日	甲辰、此条当在癸卯条次

これによると、他書との相違、写本間の異同、さらに編年上の錯簡が実におびただしいことが分かる。

こうした問題点がなぜこれほど生じたかの分析は今後に委ねるとして、編年上の錯簡は、正確な暦と照合すればすぐに判明する単純な誤りであるにもかかわらず、現に生じている事実を重視するとき、三つの理由がすぐに想起でき

る。一つは、記録に関する時間的な観念が比較的にあいまいであったこと。おそらくその原因は、実際に事が起きた時を重視するより、観念上の時を大切にしてきた伝統に由るのである。一つは干支には、類似した発音を持つものが多いので、記録するさい同音異字の混同がおこりうることである。

① 十 干
甲⁽¹⁾ 乙⁽²⁾ 丙⁽³⁾ 丁⁽⁴⁾ 戊⁽⁵⁾ 己⁽⁶⁾ 庚⁽⁷⁾ 辛⁽⁸⁾ 壬⁽⁹⁾ 癸⁽¹⁰⁾

② 十二支
子⁽¹⁾ 丑⁽²⁾ 寅⁽³⁾ 卯⁽⁴⁾ 辰⁽⁵⁾ 巳⁽⁶⁾ 午⁽⁷⁾ 未⁽⁸⁾ 申⁽⁹⁾ 酉⁽¹⁰⁾ 戌⁽¹¹⁾ 亥⁽¹²⁾

十干では、(1)と(7)、(6)と(10)、(8)と(9)であり、十二支では(1)と(8)、(3)と(5)と(9)、(2)と(10)がその可能性をもつ。筆者の体験では、十干では書き誤りはほとんど生じなかったが、十二支では(2)・(10)、(3)・(5)・(9)の混同があらわれた。したがって、一つの視点として、『続日本紀』の錯簡部分に、同音異形の干支を当ててみることも必要かも知れない。残る一つは、転写の際に、十干の乙と己、十二支の辰と戌とを読み違える可能性が多いことである。

(五) 「続日本紀」干支と同日付の比較

前項で『続日本紀』の記事に多くの過誤のあることを指摘し、編年上の錯簡理由として、主として時の認識のあいまいさがあることを述べたが、それらの判断は、次の一覧表によっても裏付けられるようである。

(備考・印は国史大系本の誤注の個所を修正して記載。備考欄中特に断りのないのは私見)

記事 番号	続 紀 暦 日			該 当 日	定 点 記 事			誤 差	備 考
	年	月	日		日	時	刻		
1	大宝	三年	二月癸卯	一日	太上天皇七十七			一日	崩日(甲寅、廿二日)を起点として五〇日目

記事 番号	続 紀 曆 日	該 当 日	定 点 記 事	誤 差	備 考
2	大宝 三年 四月癸巳	二日	太上天皇百日齋	ナシ	崩日(甲寅、廿二日)を起点として一〇〇日目
3	慶雲 元年 十一月癸巳	一日	太上天皇百七齋	?	"
4	四年 六月辛巳	一五日	六月十五日(七月壬子(十七日)詔)	ナシ	"
5	七月壬子	一七日	七月十七日(同日詔)	ナシ	六六八日目
6	和銅 元年 正月乙巳	一日	正月十一日(同日詔)	ナシ	
7	十一月己卯	二二日	十一月廿一日(天平八年十一月丙戌(十一日)表)	ナシ	
8	癸未	二五日	十一月廿五日(右同表、但シ廿三日ノ事カ)	?	内容は廿三日条がより合う
9	和銅 二年 六月癸丑	二八日	十一月廿二日(養老四年三月己巳(十七日)太政官奏)	?	勅が廿八日で、同趣旨の符が十七日に出ているのは疑問。但し、詔とあるを勅としているので、別かと思われる。
10	養老 四年 十一月壬辰	二二日	十二月 七日(同日詔)	ナシ	
11	二年 十二月丙寅	七日	八月 一日(同日詔)	ナシ	
12	四年 八月辛巳	一日	七月 七日(同日詔)	ナシ	
13	六年 七月丙子	七日	九月 七日(同十月乙卯(廿三日)詔)	三四日	大系頭注曰、九月七日云々、上文係是月癸卯
14	七年 十月癸卯	一日	二月 四日(同三月辛巳(廿二日)長屋王申)	二日	大系頭注曰、四日勅上文係丙甲、案四日即位、四、或当抛丙申条作六
15	神亀 元年 二月丙申	六日	八月 九日(天平神護二年五月乙丑(十一日)入政官奏)	ナシ	
16	五年 八月壬申	九日			
17	天平 元年 二月癸酉	一二日	二月十二日(同二月丙子(十五日)勅)	ナシ	
18	四年 七月丙午	五日	七月 五日(同日詔)	ナシ	
19	八月壬辰	二二日	八月廿二日(天平宝字三年三月庚申(廿四日)大宰府言)	ナシ	
20	十一月丙寅	二七日	十一月廿七日(同日条記事)	ナシ	
21	五年 五月辛卯	二六日	五月廿六日(同日勅)	ナシ	
22	六年 四月戊戌	七日	今月 七日(同四月戊申(一七日)詔)	ナシ	

番号	記事	続紀曆日	該当日	定 点 記 事	誤 差	備 考
24	天平 七年 五月戊寅	二三日	五月廿三日（同日勅）	ナ	三日	大系頭注日、三今意補
25	閏十一月戊戌	一七日	閏十一月十七日（同日詔）	ナ	ナ	
26	九年 五月壬辰	一九日	五月十九日（同日詔）	ナ	ナ	
27	七月乙未	二三日	七月廿二日（同日詔）	ナ	一日	
28	十一月戊子	二六日	二月廿六日（同日詔）	ナ	ナ	
29	十二月 六月庚午	一五日	六月十五日（同日詔）	ナ	ナ	
30	十月丙子	二三日	今月廿三日丙子（同十一月丙戌（三日）条）	ナ	ナ	十一月丙戌条に「今月廿三日丙子」とあるから、今月は先月の誤り
31	十三年 二月乙巳	二四日	二月十四日（天平十九年十一月己卯（七日）詔）	一〇日	一〇日	大系頭注日、乙巳、当拠下文十九年十一月詔作乙未（十四）
32	九月乙卯	八日	九月 八日（同日勅）	ナ	ナ	
33	十五年 十月辛巳	一六日	十月十五日（同日詔）	ナ	一日	
34	十七年 四月甲寅	二七日	四月廿七日（同日詔）	ナ	ナ	
35	十八年 三月丁卯	一五日	三月十五日（同日勅）	ナ	ナ	
36	十九年 正月丁丑	一日	正月 一日（同日勅）	ナ	ナ	
37	十二月乙卯	一四日	十二月十四日（同日勅）	ナ	ナ	
38	廿年 三月戊寅	八日	三月 八日（同日勅）	ナ	ナ	
39	天平勝宝 元年 四月乙未	二日	四月 一日（同日条）	ナ	一日	大系頭注日、原作戊、拠原傍朱書金本印本改
40	閏五月癸卯	一〇日	閏五月 十日（同日詔）	ナ	ナ	
41	四年 正月辛巳	三日	正月 三日（同日条）	ナ	ナ	
42	八歳 五月辛酉	八日	（聖武） 太上天皇初七	ナ	ナ	崩日（乙卯、二日）を起点として七日目
43	戊辰	一五日	二七	ナ	ナ	一四日目
44	乙亥	二二日	三七	ナ	ナ	二二日目
45	六月丙戌	四日	五七	ナ	三日	三二日目

記事番号	続紀曆日	該当日	定 点 記 事	誤 差	備 考
46	天平勝宝 八歳 六月丙申 癸卯	一四日	六七	ナシ	崩日(乙卯、二日)を起点として四二日目
47	天宝宝字 元年 三月戊申 丁丑	二〇日	七七	ナシ	・ 四九日目
48	天宝宝字 元年 三月戊申 丁丑	二〇日	三月 廿日(同八月甲午(十八日)勅)	ナシ	大系頭注曰、辛、恐当抛上文勝宝九歳紀作丁
49	天宝宝字 元年 三月戊申 丁丑	二九日	三月 廿九日辛丑(天宝宝字二年淳仁即位前紀)	ナシ	大系頭注曰、乙巳、恐当抛天平勝宝九歳紀作辛巳
50	四月辛巳	四日	四月 四日(同日勅)	ナシ	大系頭注曰、閏、抛上文宝字元年紀補
51	五月甲戌	九日	五月 九日(天宝宝字三年丙申(廿二日)記事)	ナシ	
52	八月甲午	一八日	八月 十八日(同日勅)	ナシ	
53	閏八月癸亥	一八日	閏八月 十八日(天宝宝字三年七月己巳(五日)記事)	ナシ	
54	十月甲子	二五日	十月 廿五日(宝龜十年閏五月丙申(廿七日)太政官奏)	ナシ	
55	三月丁丑	一六日	三月 十六日(宝龜三年八月庚申(十二日)太政官奏)	ナシ	
56	七月癸丑	二六日	皇太后七七齋(光明皇后)	ナシ	崩日(乙丑、七日)を起点として四九日目
57	十一月壬辰	六日	十一月 六日(同日勅)	ナシ	四年六月七日崩、一周忌
58	六月庚辰	七日	皇太后周忌齋	ナシ	大系頭注曰、恐当作廿八日
59	十月己卯	二八日	十月 六日(同日勅)(金本堀本及紀略作十六日)	?	
60	三月己未	二二日	三月 廿二日(宝龜十一年七月甲申(廿二日)記事)	ナシ	
61	十月己卯	二二日	今月十六日(同日勅)	ナシ	
62	十二月庚寅	一六日	十二月 廿八日(同日勅)	ナシ	
63	天宝宝神護 二年 二月甲午(丙)	二八日	二月 廿日(同年六月丙申(十二日)勅)	一二日	大系頭注曰、甲午、六月丙申勅及谷朱イ本作丙午(廿日)、抛右改
64	天宝宝神護 二年 二月甲午	二八日	四月 廿八日(同日勅)	六日	大系頭注曰、八恐当作二
65	神護景雲 三年 三月丙申	二二日	三月 廿八日(同日勅)	ナシ	
66	神護景雲 三年 三月丙申	二八日	六月 一日(同日勅)	ナシ	宝龜元年七月癸未(廿三日)の太政官奏も「六月一日」とする
67	宝龜 元年 六月壬辰朔	一日		ナシ	

記事 番号	統 紀 曆	該 当 日	定 点 事 誤	誤 差	備 考
68	宝龜元年 八月癸巳	四日	八月四日癸巳（同年光仁即位前紀）	ナシ	崩日（癸巳、四日）を起点として 五日目
69	丁酉	八日	天皇一七	二日	十三日目
70	乙巳	一六日	二七	一日	二十日目
71	壬子	二三日	三七	一日	二七日目
72	己未	三〇日	四七	一日	三十四日目
73	九月丙寅	七日	五七	一日	四十一日目
74	癸酉	一四日	六七	一日	四八日目
75	辛巳	二二日	七七	二日	四九日目
76	五月甲寅	二九日	（田原天皇八月九日忌斎） （應基皇子） （稱徳） 高野天皇忌斎	ナシ	靈龜二年八月甲寅（十一日）、二品志賀親王薨（統 紀） 崩年、宝龜元年八月癸巳（四日）
77	八月丁巳	四日	十二月十五日（宝龜元年光仁即位前紀）	ナシ	大系頭注日、此月无辛未、勘勘文
78	十二月丁卯	一五日	八月十二日（宝龜十年八月壬子（十 五日）勅）	ナシ	大系頭注日、正、原作六、勘御本金本改
79	八月庚申 （癸未）	一二日 （七日）	正月 七日（同日勅）	ナシ	宝龜六年九月壬寅（十一日）勅日「十月十三日、 是朕生日」
80	正月辛未	？	四月十七日（同日勅）	一日	
81	四月壬戌	一八日	十二月廿五日（同日勅）	ナシ	
82	十二月乙未	二五日	六月 三日（同日勅）	ナシ	
83	正月丁酉	三日	三月廿四日（同日勅）	ナシ	
84	三月庚午	二四日	八月十九日（同日勅）	ナシ	
85	八月丙辰	一九日	天長節	ナシ	
86	十月己酉	一三日	正月十九日（同日詔）	ナシ	
87	正月乙酉	一九日	正月 一日（同日詔）	ナシ	
88	正月辛酉朔	一日	三月廿五日（同日詔）	ナシ	
89	天応元年 三月甲申	二五日		ナシ	

記事番号	続紀暦日	該当日	定 点 記 事	誤 差	備 考
90	天応 元年 七月壬戌	五日	七月 五日(同日詔)	ナシ	
91	十二月甲辰	二〇日	十二月 廿日(同日詔)	ナシ	
92	癸丑	二九日	太行天皇初七	ナシ	崩日(丁未、廿三日)を起点として七日目
93	延暦 元年 六月乙丑	一四日	六月十四日(延暦二年七月乙巳(三十日)詔)	ナシ	
94	七月丙午	二五日	七月廿五日(同日詔)	ナシ	
95	十二月辛未	二三日	太上天皇周忌	ナシ	延暦元年十二月壬子(四日)勅曰「太上天皇周忌御斎、当今月廿三日」
96	四年 五月癸丑	一九日	五月十九日(同六月癸酉(十日)勅、(高野新笠)同辛巳(十八日)表)	ナシ	
97	八年 十二月乙未	二八日	中宮七七御斎、当来年二月十六日(同十二月丙申(廿九日)勅)	ナシ	崩日(乙未、廿八日)を起点として四九日目
98	九年 閏三月壬午	一六日	閏三月十六日(同日詔)	ナシ	
99	十二月己未	二八日	中宮周忌	ナシ	同十一月戊寅(十六日)勅曰「中宮周忌、当来月廿八日」

『続日本紀』には、相互に照応する記事が九九カ所ある。このうち具体的な日付をもつものは七四カ所だが、表中の14・15・27・31・33・39・45・64・65・69・70・71・72・73・74・81の一六カ所に矛盾がある。

さらに、天皇の仏忌などの記載があり、これによって編年上の過誤を推測することができる。例えば天平勝宝八歳五月辛酉(八日)に聖武天皇の初七忌が執行されているが(42)、聖武天皇の崩日は五月乙卯(二日)とあるから、崩日の乙卯を起点すると辛酉は七日目に当たり、矛盾はない。43の二七忌、44の三七忌も、それぞれ一致する。

つまり忌日の一致は、2・42・43・44・46・47・57・59・75・77・92・97の一ニカ所におよび、これによると、死亡日を当日としているので、さきの死の前日から数える風習があるとの末永雅雄氏の指摘と相容れないようである。が、称徳天皇の忌日は二七忌から六七忌(70→74)まで、すべて死亡当日から起算すると一日足りない。つまり、死

亡前日から起算した例証とされるようでもある。

それでは仏忌ないしは死亡日の数え方は、前日または当日起算と考えてよいかというと、ことはそれほど明確ではない。例えば、称徳天皇の仏忌は一七忌から七七忌（69→75）まで記されているが、前日起算と思われるのは前述の通り二七忌から六七忌で、はじめの初七忌（69）は死亡の二日前の起算となり、七七忌（75）は当日起算となる。この事例は、記録の誤りかあるいは、何かの事情によっては仏忌の日が動くことを示している。

さらに、こうした判断をいっそう強めさせるのが、持統天皇・慶雲元年十一月癸巳の百七忌（3）である。百日忌（2）が崩日を起点としてちょうど一〇〇日目に当たるのに百七忌では六六八日目に当たるのである。

『続日本紀』の記録性には、こうした問題点がふくまれていることを十分考慮する必要がある。

（六）金石文の問題点

以上、文献とくに『続日本紀』の事実性の問題にメスを入れてきたので、次に墓誌を含めた金石文の問題にふれておきたい。

（備考、金石文中の「」内は三木補）

記事 番号	金 石 文	対 校 暦	備 考
1	元興寺金銅釈迦仏造像記（元興寺伽 監縁起所引） （イ）十三年歲次乙丑四月八日戊辰 （ロ）明年己巳四月八日甲辰	（イ）は推古天皇十三年（六〇五）。この年四月の朔 は、宋の元嘉曆、隋の開皇曆、『書紀』干支ともに 辛酉で、戊辰八日は一致する。 （ロ）は推古天皇十七年（六〇九）。四月の朔は、元嘉 曆、隋の大業曆、『書紀』ともに丁酉で、八日甲辰	『書紀』は造像の日を（推古天皇） 十四年夏四月乙酉朔壬辰（八日）と する。

記事 番号	金 石 文	対 校 暦	備 考
2	天寿国曼荼羅續帳銘文 (イ) 歳在辛巳十二月廿一〔日〕癸酉 (ロ) 明年二月廿二日甲戌	は一致 (イ) は推古二十九年(六二一)。この年十二月の朔は、元嘉暦で甲寅、二十一日は甲戌となり一致しない。唐の戊寅暦は十二月癸丑朔で、廿一日癸酉は一致 (ロ) は推古三十年(六二二)。二月朔は元嘉暦・戊寅暦ともに癸丑で、廿二日甲戌は一致	(イ) は孔部間人母王の忌日 (ロ) は聖德太子の忌日 「上宮聖德法王帝説」は太子の忌日を「(推古三十年)壬午年二月廿二日夜半」又は「廿二日」と記す
3	法隆寺金銅釈迦三尊造像記 (イ) 法興元卅一年歳次辛巳十二月 (ロ) 「明年」二月廿一日癸酉王后即世翌日法皇登遐	(イ) は推古二十九年(六二一)。 (ロ) は推古三十年(六二二)。二月朔は元嘉暦・戊寅暦ともに癸丑で、廿一日癸酉は一致	(イ) は鬼前太后(2のイ)の忌日 (ロ) は膳部妃の忌日と聖德太子の忌日史料2と一致 「書紀」は太子の忌日を「(推古天皇)廿九年春二月己丑朔癸巳」(五日)とする 開は十二直の十一番目
4	野中寺金銅弥勒菩薩造像記丙寅年四月大旧八日癸卯開記	天智天皇五年(六六六)に当たる。四月朔は元嘉暦・戊寅暦ともに丙申で、八日癸卯は一致。唐の麟徳暦(儀鳳暦)では癸卯は七日となる	
5	船王後墓誌 歳次辛丑十二月三日庚寅	舒明天皇十三年(六四一)に当たる。十二月朔は元嘉暦・戊寅暦ともに戊子で、三日庚寅は一致する	ここでは、敏達天皇を「平鏡院宮治天下天皇」、推古天皇を「等由羅宮治天下天皇」舒明天皇を「阿須加宮治天下天皇」と記す
6	小野毛人墓誌 歳次丁丑年十二月上旬即葬	天武天皇六年(六七七)に当たる	

記事 番号	金 石 文	対 校 暦	備 考
7	妙心寺鐘銘 戊戌年四月十三日壬寅収	文武天皇二年（六九八）に当たる。四月朔は儀鳳暦で庚寅、十三日壬寅は一致。収は十二直の十番目に当たる	『統日本紀』の記載は文武天皇元年（六九七）から始まるが、儀鳳暦を用いている。但し『書紀』では、同八月を元嘉暦で記す
8	那須国造碑 歳次康子年正月二壬子日辰	文武天皇四年（七〇〇）に当たる。康子は庚子の宛字。正月朔は儀鳳暦で辛亥、二日壬子は一致	
9	文禰麻呂墓誌 慶雲四年歳次丁未九月廿一日卒	元明天皇慶雲四年（七〇七）。『統紀』は、同十月〔乙丑朔〕儀鳳暦〕戊子（廿四日）卒とする	
10	威奈大村骨藏器 其年〔慶雲四年〕冬十一月乙未朔廿一日乙卯歸葬	元明天皇慶雲四年（七〇七）。十一月乙未朔廿一日乙卯は儀鳳暦と一致	
11	下道罔勝罔依母夫人骨藏器 和銅元年歳次戊申十一月廿七日己酉	元明天皇和銅元年（七〇八）。十一月朔は儀鳳暦で己未、廿七日は乙酉となる。己酉の干支は該当しないから、乙酉の誤り	
12	伊福吉部德足比売臣骨藏器 和銅三年十一月十三日己未	元明天皇和銅三年（七一〇）。十一月朔は儀鳳暦で丁未、十三日己未は一致	
13	建多胡郡弁官符碑	元明天皇和銅四年（七一一）。三月朔は儀鳳暦で丙	『統紀』和銅四年三月辛亥（六日）

記事 番号	金 石 文	対 校 暦	備 考
13	和銅四年三月九日甲寅	午、九日甲寅は一致	条に、関連記事がある
14	元明天皇陵碑（『東大寺要録』所引） 養老五年歲次辛酉冬十二月癸酉朔十 三日乙酉葬	元正天皇養老五年（七二二）。十二月癸酉朔十三日 乙酉は儀鳳曆と一致	『統紀』当条に関連記事があり、暦 日は一致
15	太安萬侶墓誌 （イ）以癸亥年七月六日卒之 （ロ）養老七年十二月十五日乙巳	元正天皇養老七年（七二三）。 （ロ）の十二月朔は儀鳳曆で壬辰、十五日は丙午で、乙 巳は十四日となる。	（イ）は『統紀』に「（七月甲子朔）庚 午（七日）」とある
16	行基骨藏器残欠 ——一年二月二日丁——	聖武天皇 ^{（天平二十二年）} 天平感宝元年（七四九）に当たる。二月朔 は儀鳳曆で丙申、二日は丁酉。残欠の「——」は「丁 」で、恐らくこの干支は「丁酉」であったと思われる	『統紀』は当条に行基の遷化を記 す。暦日は一致
17	竹野王塔銘（『日本金石図録』所引） 天平勝宝三年歲次辛卯四月廿四日庚 子	孝謙天皇天平勝宝三年（七五一）。四月朔は儀鳳曆 ・大衍曆ともに癸丑で、廿四日は丙子となる。庚子 は誤り	
18	石川年足墓誌	淳仁天皇天平宝字六年（七六二）。（イ）の九月丙子朔	『統紀』当条に、関連記事がある

記事 番号	金 石 文	対 校 暦	備 考
18	(イ)天平寶字六年歲次壬寅九月丙子朔 乙巳春秋七十有五葬 (ロ)「同」十二月乙巳朔壬申葬	乙巳は儀鳳曆で三十日。唐の五紀曆は、九月朔を丁丑とする。 (ロ)の十二月乙巳朔は儀鳳曆・五紀曆ともに合致し、壬申は二十八日となる	(イ)の暦日は一致
19	高屋枚人墓誌 宝龜七年歲次丙辰十一月乙卯朔廿八日壬午葬	光仁天皇宝龜七年（七七六）。十一月乙卯朔廿八日壬午は大衍曆と一致。唐の五紀曆とも合う	
20	紀吉継墓誌 延暦三年歲次甲子朔癸酉丁酉	桓武天皇延暦三年（七八四）。「癸酉朔」は大衍曆で正月に当たり、丁酉は二十五日となる	

二〇点の金石文を網羅したが、これらを問題別に整理すると、

①文献と日付・干支の一致しないもの一例（表中2—(イ)）

②干支に誤記のあるもの二例（11・17）

③文献と製作年時の一致しないもの一例（1）

④死亡日が文献と合わないもの一例（9）

となる。（15を除く）

このうち、①は元嘉曆とは合わなくても、当時中国（唐）で行なわれていた戊寅曆と一致するので、もしこのころ

戊寅曆が日本に入っていたとすれば、先述(一)・(二)の一日のズレの理由を使用曆の相違に求めようとした岸俊男氏の指摘が意味をもってくる。

だが、その他の金石文が、一応各時代の公布曆と一致するところをみると、公布曆以外の曆が流布したとは考えにくいように思われるので、積極的には認めにくい。

②の誤記の事例のうち11は、文献で乙||己の交替が起きる可能性をあげておいたが、金石文でも同様のことが起きた例証となる。

③は、おそらくこの場合、金石文を正しいとみてよいようである。

④は、どちらが正しいかの決定を下す根拠がない。岡田清子氏と同様の立場に立てば、ここでも躊躇することなく金石文に凱歌をあげることができるのかも知れないが、筆者にはその勇氣はない。

かねて金石文を信頼できるとする見解は多く、たとえば竹内理三氏は、表中10の資料によって『続日本紀』が訂正される必要があると指摘している。⁽⁷⁾筆者には竹内氏の見解がよく呑み込めないので、すこしその点にふれておこう。

威奈真人大村墓誌 本銘は鍍金銅合子の蓋に刻まれてあり、天明年中の発掘にかかる。威奈は、紀に韋那・偉那・猪名・為奈等に作る。宣化天皇四世の裔、鏡公の第三子威奈大村の略歴を誌し、慶雲四年四月廿四日任国越後に卒し、その年大倭に帰葬した次第を誌してある。続日本紀慶雲四年閏正月庚戌の条に、従五位上猪名真人大村を越後守と為すこと見え、本誌に、二年十一月十六日とあるに合はず、蓋し続紀の誤を正すものである。(『寧楽遺文』下、昭和四十四年一月第四刷、一四七～一四八頁、東京堂出版)

竹内氏の要旨は、

(1) 『続日本紀』には威奈大村の越後守任官を「慶雲四年閏正月庚戌」とする。

(2) 墓誌は「同二年十一月十六日」を越後守任官とする。

のように対比させ、結局、(1)を誤りとされた。

まず(1)についていうと、『続日本紀』は、慶雲三年の同日と記しているので、「四年」は竹内氏の誤記である。それにしても、(2)と矛盾するが、(2)もよく見ると、

慶雲二年、命兼太政官左小弁・越後北疆衝接蝦虜柔懷鎮撫允、属其人。同歲十一月十六日命卿除越後城司。

とあり、慶雲二年十一月に除せられたのは「越後城司」にである。竹内氏は「城司」を「守」と即断して『続日本紀』を誤りとされたが、城司は「城の役人」の意味だから、必ずしも「守」と考えなければならないものではないであろう。

事実、大村の慶雲二年の官職は墓誌（正しくは骨蔵器）によると「柔懷鎮撫允」で、「允」は地方三等官にすぎない。それが同年中に一等官に昇格するとは考えにくい。したがって、墓誌と『続日本紀』の記載は対立するものというより、

(1) 慶雲二年、越後北疆衝接蝦虜柔懷鎮撫允。

(2) 同十一月十六日、越後城司に除す。

(3) 同三年閏正月五日、越後守と為す。

のように補完しあうと見ることもできる。この解釈に立てば、文献より金石文が優位に立つとは必ずしも言えないことになろう。

おわりに

以上、ながながと述べてきたが、ここに載せた一覧表は、さらに細かく分析することが可能である。だが、すでに与えられた紙数を大幅に上まわってしまったので、これ以上の検討はひとまずおかねばならない。終りに一言すると、表にもとづいた私見はあくまでも試案で、それにこだわるつもりはない。幸いに提示した一覧表が大方の益するところとなり、さらに多角的な考察が進められれば、筆者の本意とするところである。

(註)

(1) これまで暦日の問題について、特に関心を抱いてきた訳ではないが、太安万侶墓誌が機縁となり、ついで、墓誌発見後間もなく、瀬戸文化財保存会理事である片岡季俊氏から、『続日本紀』の干支・日付に矛盾がある点の疑問が寄せられたので、それらに触発されて、『続日本紀』の暦日を検討したのである。緒口を与えられた片岡氏には感謝申しあげたい。

(2) 太安万侶の氏名表記・位階勲等・卒年月日についての三者の比較一覧はこのようである。

続日本紀

慶雲元・正・癸巳（七日）	正六位下から従五位下に授位
和銅四・四・壬午（七日）	正五位下から正五位上に授位
靈龜元・正・癸巳（十日）	正五位上から従四位下に授位
靈龜二・九・乙未（廿三日）	（従四位下）氏ノ長
養老七・七・庚午（七日）	卒（民部卿従四位下）

古事記	
和銅五・正・廿八日	正五位上勲五等
墓誌	
養老七・七・六日	卒（從四位下勲五等）

(3) 『続日本紀』と同校注及び墓誌の対応はこのようである。

続日本紀 国史大系校注 太安万侶墓誌	養老七年 七月朔の干支	安万侶卒の干支・日付
	(甲子)	庚午 (七日) 六日

(4) 三者の対応はこうなる。

続日本紀 国史大系校注 太安万侶墓誌	養老七年十二月朔の干支	安万侶の埋葬干支・日付
	(壬申)	(乙巳は十四日) 十五日乙巳

(5) 持統天皇の崩日を記して、『日本書紀』卷三十は、「八月乙丑朔」とするが、『続日本紀』卷一は文武天皇

の即位を記して「八月甲子朔」とする。

この一日の差は、『紀』が元嘉曆により、『統紀』が儀鳳曆によったと考えられている。あと一例は本文六節中の一覽表中(2-14)を参照されたい。ただし、後者については、曆の相違と見る見解に、必ずしも筆者がしたがわないことは先述した(三五頁)。

(6) 讖緯説によって神武即位の年代が得られたこと、『百濟記』『百濟新撰』などにより干支二巡廻させたことなど、『日本書紀』の編纂過程には、多くの年代上の作為があり、これが前代からの意識に根ざしていること。さらに、鏡・刀剣などには、吉祥のための事実でない月日が多く見られることなどから、この判断はえられる。

(7) 本稿成稿後、参考までに『国史大辞典』(昭和五十四年、吉川弘文館)で威奈大村骨藏器を引いたところ、「国史の欠を補い、あるいは誤りを正す記事もあって、古代史上有益な史料となっている。」(七二九頁)とあった。国史の「誤りを正す記事」とは具体的に何を指しているかははっきりしないが、もし、竹内理三氏の見解を承けてのことなら、本文で述べておいたように、必ずしもそうとばかりいえないのである。

(昭和五十四年十月一日)

(追記)

本稿成稿後、内田正男氏「太安万侶の墓誌の日付」(『文学』一九七九年七月号)を見る機会を得た。それによると、内田氏は岡田清子説にふれて、「半年の間に一方は前日に、一方は翌日にずれるなどというくい違いは曆計算の上からはでて来ない」と批判され、結論として、次のように述べられている。つまり七月六日と庚午の差異は、安万侶の死が、六日とも七日とも受けとられる「夜半から明

け方に発生した」可能性によるとも考えられる。次に、十二月十五日乙巳の問題は、丙午の日が「葬」の吉日に当たることから、「十五日丙午」が正しく、「乙巳」としたのは、「当時の人といえども日と干支をいつも一緒に記憶していたはずもなく、卒去の日と同様に、日付だけがふつうは用いられていたのであろう。埋葬の日は、かなり以前に丙午の日、——十二月十五日と決められても、日付の方のみが記憶に残り、墓誌に刻むときの誤りで隣りの乙巳が付けられたとする考えは突飛であらうか。」と。

この内田氏の見解は、二つの日付・干支の矛盾のうち、後者について墓誌の誤りを推定した私見とほぼ合致するものであり、我が意を得た思いがする。前者の矛盾については、若干見解が異なったが、なお私説の可能性が否定できないことはつきりしたようである。なお、金石文一覽の作成に当って、飛鳥資料館編『日本古代の墓誌（銘文篇）』（昭和五十四年一月三十日再版、同朋舎）、竹内理三氏編『寧楽遣文』下（昭和四十四年一月第四刷、東京堂出版）、大谷光男氏『古代の暦日』（昭和五十一年五月十日、雄山閣）を参照した。お礼申しあげる。

（同五十四年十月十一日）